

オール沖縄で
医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

Top Interview

2019 Winter Vol.07

最南西端の暮らしと
国境を守る
大切な医療がある。

新・沖縄県立八重山病院

篠崎 裕子 病院長

Take Free

ご自由にお持ちください

新・沖縄県立八重山病院特集



Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン

沖縄で活躍する医師たちを通して

沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン『ムルウチナー』。

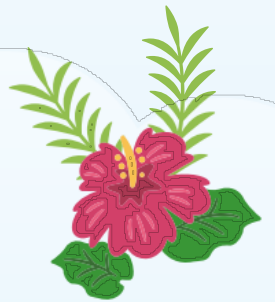
『ムル』は全部、『ウチナー』は沖縄を意味します。

島の人々の健康を守るためには

地域住民との“信頼関係”と地域医療機関との“連携”が必要不可欠です。

医療の本質と島の未来を見つめ続ける沖縄県の医師たちの

『ムルウチナー』を感じていただけたら幸いです。





2019 Winter Vol.07

INDEX

P.02

Top Interview

最南西端の暮らしと国境を守る 大切な医療がある。

新・沖縄県立八重山病院 病院長

篠崎 裕子 先生

P.05

Hospital Review

新・沖縄県立八重山病院

麻酔科部長 上原 真人 先生

P.08

OKINAWA DOCTORS SCENE

沖縄で働く医師の話

～ 新・県立八重山病院特集 ～

#01

内科（感染症内科）中島 知 先生

#02

小児科 村井 裕子 先生

#03

産婦人科医長 古賀 千悠 先生

#04

小浜診療所 山田 拓 先生

P.16

OKINAWA Residents Story

沖縄の研修医の話

～ 新・県立八重山病院特集 ～

#01

専攻医 富名腰 朝史 先生

#02

専攻医 亀谷 航平 先生

P.20

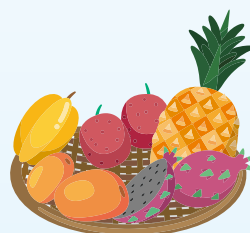
Okinawa Crossword Puzzle

沖縄クロスワードパズル

表紙写真撮影者

循環器内科 村井 俊介 先生

Shunsuke Murai





特集 新・沖縄県立八重山病院

最南西端の 暮らしと国境を守る 大切な医療がある。

麻酔科医として多くの手術に携わり、沖縄県病院事業局では県立病院の改革に尽力。

県立中部病院、県立八重山病院の副院長を経て、県立八重山病院の院長に就任。

2018年10月1日に新築開院した、県立八重山病院の新たな医療づくりを牽引する
篠崎裕子院長のキャリアの軌跡に迫った。

そこから見てくる、八重山病院の医療と、沖縄の地でキャリアを歩む魅力とは？



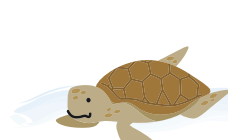
Top Interview

新・沖縄県立八重山病院 病院長

篠崎 裕子 先生

Yuko Shinozaki

沖縄県嘉手納町出身。金沢医科大学医学部卒業。大学卒業後、沖縄県立中部病院で研修を行い、麻酔科医の道に進む。沖縄県立八重山病院に赴任した後、夫の転勤や子育てにより6年間休業。復帰後、沖縄県立中部病院で活躍し、麻酔科副部長を経て沖縄県病院事業局の医療企画監に就任。6年間、行政の中で県立病院の改革や医師の確保に努める。2016年4月に沖縄県立中部病院の副院長、2017年4月に沖縄県立八重山病院の副院長。2018年4月に沖縄県立八重山病院の院長に就任。



若いときの経験が、
その後の大きな力となる

沖縄県立八重山病院は、日本最南西端の島々である八重山列島で唯一の総合病院だ。その八重山病院が2018年10月1日に新築開院した。ここから生まれる新たな医療と病院づくりを牽引するのが、2018年4月に院長に就任した篠崎裕子先生である。

「建物や設備が新しくなっても、良質な医療サービスは提供できません。大事なものは人なんです。医療人の教育、育成にも大きな力を注いでいきたい」と篠崎先生は強く語った。

篠崎先生は大学を卒業後、当時、スーパーローテーションによる研修で注目を集めていた県立中部病院でトレーニングを積んだ。中心静脈ラインなどの麻酔科医としての手技が自分に合っていると感じたことや、当時、子育てをしながら麻酔科の第一線で活躍していた、八重山病院の前院長である依光たみ枝先生の姿をみて麻酔科の道に進んだ。県立中部病院では月に10回以上の当直をこなし、緊急手術では、麻酔科医がまだ医師になって間もない篠

崎先生だけという場面も度々あった。

「そんなときは他科の医師や病院スタッフが『何か手伝うことはないか』と集まってくれたんです。そうした協力体制があったからこそ、厳しい状況も乗り越えることができました。大変でしたが、この時の経験がその後の大きな力になりましたね」

4年目には八重山病院に赴任し、結婚して子どもも生まれました。当時は子どもを預ける施設がなかったため、緊急手術があれば個人宅や、ときに子どもを病院に連れて行きて看護士に預けたこともある。

「地域と病院が子育てに参加してくれました。八重山の人々のあたたかさがあったからこそ、仕事を続けることができました」

長いブランクからの復帰。
キャリアは後からでも
ついてくる

子どもが一歳になった頃、篠崎先生は海上保安庁に勤める夫の転勤に同行するため、医師業を辞めた。夫の転勤によって福岡、仙台、横浜などに住んだ。転勤の度に子どもも転校



を余儀なくされる。そんな子どもを不憫に思い、篠崎先生は子どもとともに沖縄の実家に戻った。そして県立中部病院から声がかかったことをきっかけに再び麻酔科医として復帰する。医師を辞めてから6年もの歳月が経っていた。

「長いブランクがあり、最初は挿管などの手技ができるかどうか不安でしたが、若い頃にたくさん経験したことは忘れていないものなんです。出産や育児によってキャリアが遅れてしまうと悩む女性医師も多いと思いますが、キャリアを遅らせても、子どもの成長を傍で見届けるのは大切なこと。キャリアは後からついてくるものです。ぜひ子育てを楽しんでほしいですね」。篠崎先生が送る、女性医師に向けて

た心強いエールだ。

篠崎先生は沖縄県病院事業局の医療企画監として、行政の場で県立病院の医師確保や改革に努めた経験も持つ。篠崎先生は、「医師を確保するためには資金が必要である」と当時の知事に何度も訴え、「医師確保基金」を実現させた。この基金は、本島北部や宮古・八重山地域の医師を安定的に確保するのが目的で、設備や医療機器の整備などにも利用される。



最南西端の 暮らしと国境を守る 大切な医療がある。



今回、八重山病院が新築開院した際に導入された320列のCTやアンギオグラフィーの導入費用、また離島・へき地に従事した医師に国内や海外留学で、一定期間キャリアを積むことができる奨学金費用も「医師確保基金」から出ている。ちなみに、この国内・海外留学制度も篠崎先生が発案して実現したものだ。篠崎先生の提言がなければ、沖縄の地域医療は危機に瀕していたかもしれない。篠崎先生は、「わたしは男性と違い女性であるがゆえ、プライドがないので、『これもできませんか、あれもできませんか』と、直接的に訴えることができたかもしれませんよ」と大きく笑った。

篠崎先生は医療企画監を6年間勤めた後、中部病院、八重山病院の副院長などを経験。当時、八重山病院の院長だった依光先生から、「次の院長はあなたしかない」と言われた。院長になることに迷いはあったが、前・沖縄県病院事業局長である伊江朝次先生から、

多くの離島を支える
八重山病院だからこそ、
得られるものがある

八重山病院の医療には独自の魅力がたくさん詰まっている。その一つが離島医療だ。八重山病院は、西表島の東部・西部、小浜島、波照間島の4か所に附属診療所を有しており、島で一人で診ることのできるジェネラリストとしてのスキルを習得できる最前線にある。さらに八重山病院では八重山諸島全ての急患ヘリ搬送も請け負い、タンカーやクルーズ船の洋上救急にも対応している。その際は必ず八重山病院の医師がヘリに同乗する。こうしたヘリによる搬送が年間に約100件。それも夜間に多いのが特徴であり、こ

うした経験ができるのは八重山病院ならではの。

「当院には全国から初期研修の先生たちが地域研修の短期研修に来て、訪問診療や看取りなどを経験し、地域との関わり方も学んでいます。最も学ぶことができる若い時期に、いろんなことを経験することで医師として大きく成長できる。八重山病院はそれに相応しい場所だと思います」

沖縄県は、全国でも有数の島しょ県であり、離島医療なくして沖縄県は成り立たない。離島に医療があるからこそ、人々は離島に住むことができ、安心して生活を送ることができるのだ。「医療は水や電気と同じように大切なインフラであり、医療を守ることは、そこに人が住めるのかどうかという重要なことにも繋がってきます。八重山病院は、日本の最南西端の医療を支える重要な砦であり、そこに住む人々の暮らしと国境を守っているんです」。そう語る篠崎先生の表情はとても誇らしげだった。

Q. 篠崎先生にとって沖縄とは？

A. 離島なくして沖縄は成り立たず。
沖縄は離島医療の最前線です。



新・沖縄県立八重山病院

INTERVIEW 麻酔科部長 上原 真人 先生 Masato Uehara



新・八重山病院、誕生。 医師の視点から、 その魅力と特徴に迫る。

2018年10月1日に新築開院した県立八重山病院。その新たな機能や設備を紹介するとともに、八重山病院でキャリアを積み、八重山で生活する魅力を麻酔科部長の上原真人先生に聞いた。

八重山諸島の中核病院である沖縄県立八重山病院が新築開院した。新病院の新たな設備や機能とともに、八重山病院における医師の働き方やスキルアップ、さらに八重山で生活する魅力について、麻酔科部長である上原真人先生に聞いてみた。上原先生は、多様なデータを用いて八重山病院の実態をまとめた「八重山病院データでムヌカンゲ」という本を執筆し、第2回日本医学ジャーナリスト協会賞の優秀賞を受賞。また「引越し実行委員会」の委員長も務め、円滑な移転を成功させた。

まずは、新しくなった主な設備や機能について紹介したい。

新病院の敷地面積は約4万㎡

で旧病院の1・6倍、延床面積は約2万3200㎡で旧病院の1・4倍と広くなった。歯科口腔外科が新設され24科となり、医療機器は県立病院では初となる320列のCTや、アンギオグラフィ、島内唯一の高気圧酸素治療装置などが導入された。設備としては輸入感染症の対応強化のため「陰圧病床」や専用の経路、エレベーターを設置。また、新生児集中治療室（NICU）から継続保育が可能な継続保育室（GCU）の整備や、陣痛分娩室（LDR）を設け、年間約600件もの出産に対応する八重山圏域で唯一の出産可能施設として大きな機能強化が図られた。



「ただし、質の高い医療の提供に最も大切なのは最新の医療機器や設備ではなく人です。たとえば、最新の炊飯器で美味しいご飯を炊けるのは当たり前ですが、医師はその炊飯器がなくても美味しいご飯を炊けるスキルがなくてはならない

のです」と上原先生は医師としての在り方を説く。そんな上原先生が、新病院となって最も期待していることが患者数の増加だ。沖縄県立宮古病院が2013年に新築開院したとき、良性疾患の手術件数が倍近くにまで増加した。患者数

が増加すれば、医師はそれだけ症例経験を積み重ねることができる。

「八重山圏域の手術が必要な患者さんのほとんどが当院に来るため、虫垂炎や頸部骨折、帝王切開などの経験を、千本ノックのように積み重ねることが出来ます。大学病院では高度な手術が多く、麻酔科でいえば『心臓外科の麻酔は得意だが、虫垂炎の麻酔は数回しか経験がない』という麻酔科医が生まれがちです。症例をバランスよく経験するためにはコモンディーズに多く触れる環境も必要。当院はそうした環境に相応しいコモンディーズの宝庫であり、今後手術件数は増加していくと期待しています」

さらに八重山病院は4つの附属の離島診療所を有しており、離島医療と密接であることも特徴だ。こうした環境は医師として独り立ちをする練習の場としても最適だと言える。「若い先生のなかには、離島で経験を積むことは、『同期に遅



れを取るのではないか、最新の知識が得られないのではないのか」という、独り取り残される怖さを感じる方もいます。しかし、今はインターネットを介して専門医に聞くことが出来ますし、最新の知識もアップデートできる。独りぼっちの怖さに負けないでほしいですね」

このように、八重山病院は医師としての幅広い実力を習得する場として非常に魅力的だ。さらに八重山地域の豊かな自然は子育てに最高の環境であり、生活面での魅力も大きい。ここには都市部で消滅した、向こう三軒両隣が健在し、地域が子どもを育てるといふ特性もある。しかし、子どもの教育・学習面を考えると二の足を踏む方もいるかもしれない。それに対して上原先生は



島内唯一の高気圧酸素治療装置



県立病院では初となる320列のCT



アンギオグラフィー



OKINAWA DOCTORS SCENE

#01 沖縄で働く医師の話
～ 新・県立八重山病院特集 ～

感染症内科を
学ぶために沖縄の地へ。
八重山病院から
日本の医療の
課題解決に立ち向かう。

● 内科（感染症内科）

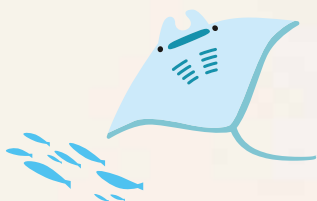
中 島 知

先生

出身地：千葉県

出身大学：東海大学医学部（2013年卒）

東海大学医学部を卒業後、東海大学医学部附属病院の周産期プログラムにて初期臨床研修。研修中に感染症内科に興味を持ち、初期研修後は、感染症内科を学ぶために沖縄県立中部病院へ。卒業後5年目に沖縄県立八重山病院の内科（感染症内科）に赴任。





挫折を経験して見えた、
自分の可能性と目指すべき道

2018年3月末、八重山圏内で1名の麻しん患者が発生した。麻しんは感染力が強く、乳児がかかった場合、重篤な後遺症や死に至るケースもある。石垣市は麻しんのまん延を防ぐため、どこよりも先に任意の集団予防接種を乳児に実施した。この集団接種を働きかけたのが八重山病院の内科（感染症内科）に勤める中島知先生だ。

「一人目の患者が出てから10日を待たずに集団接種まで踏み切れたのは、院長や副院長が早く動いてくださり、市役所へ働きかけてくださったから。自分がこうしたいと思ったときに話を真摯に聞き、それに協力して動いてくださる方々がいたからこそなんです」

中島先生は祖父が産婦人科医であった影響もあり、初期研修は東海大学の周産期プログラムを



選んだ。内科を回っているとき、中島先生はカテーテルが上手くできないことに医師としての自信をなくしてしまった。そんな時期に出会ったのが感染症内科だった。

「当直で感染症内科の先生に肺炎患者さんの治療を教えてもらったとき、何もできなかった自分が痰をグラム染色して菌を推定し、最適な抗菌薬を導き出すことはできた。それから病院中の検体をひたすら染めていました」

こうして中島先生は感染症内科を専門に進むことを決める。日本の臨床感染症教育の発祥の地ともいえる沖縄県立中部病院で後期研修を行い、卒後5年目に八重山病院に赴任した。中島先生は感染症内科以外に、血液腫瘍内科も診ているという。

「ここは八重山圏域の最後の砦です。専門の診療科がないのなら専門外でも診る。専門外だからと患者さんを帰してしまったり、結局自分に帰ってくるんです。八重山病院は幅広い知識やスキルを自然と得ることができる環境であり、ここでの経験は今後の医師人生の大きな糧となるはずです」

目標は決まっていなくてもいい。
可能性を広げておくことが大事

日本ではエイズ患者が増え続け、外国からの旅行者は大型ク



ルーズ船でも多く訪れ、洋上救急の頻度や感染症が持ちこまれるリスクも高まっている。感染症は人に移る前の早期治療が重要であり、外国人が日本の医療を受けやすくするための対策も必要だ。

「東京オリンピックは各国の感染症の交流にもなります。日本はグローバル化が進んでおり、病院もそれに対応できるように変わらなければならぬ。渡航医学など、感染症内科の役割はこれから日本にとって非常に重要であり、やるべき課題はたくさんあります」。そう語る中島先生の真つすぐな視線に迷いはない。

当初は産婦人科医を目指し、

初期研修で挫折を経験し、そこで出会った感染症内科に惹かれて沖縄の地にきた中島先生。今は医師としての自信をまとい、日本の医療の課題解決に向かって強い意志を抱いている。

「目標を絞り、それに突き進むことは大切なこと。しかし自分が挑戦できる若い頃に窓口を狭くしてしまう必要はありません。若いうちにいろんなものを見て、いろんなことを経験することで可能性は大きく広がります。目標は決まっていなくてもいいですよ」と中島先生は医師として自信を失っていた過去を振り返りながら、笑顔を輝かせた。

● 内科

総合診療科、循環器内科、消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、感染症内科など、幅広い領域の診療を行い、さらに感染管理など病院全体の安全管理も担っている。年間約36,000人の外来患者、約2,500人の入院患者を診療し、「沖縄県地域がん診療病院」として、がんの内科的治療（内視鏡的治療、化学療法など）にも積極的に取り組んでいる。



Crested Serpent
カクレリサシ

OKINAWA DOCTORS SCENE

#02 沖縄で働く医師の話
～ 新・県立八重山病院特集 ～

子どもたちを救うことは
未来をつくること。
八重山の素晴らしい未来を
つくるために
少しでも貢献したい。

YONAGUNI HO
ヨナグニウマ

●小児科

村井 裕子 先生

出身地：愛知県 出身大学：名古屋市立大学医学部（2003年卒）
名古屋市立大学医学部を卒業後、同大学の小児科に入局。医局の人事で関連病院を回りながら小児科医としての研鑽を積む。2017年8月、循環器内科医である夫の沖縄県立八重山病院の赴任に伴い、自身も同病院の小児科に赴任。



医師として成長するために、
夫と共に八重山病院へ

小さい頃の夢は保母さんだった。とにかく子どもが好きだった村井裕子先生は、大学卒業後に迷いなく母校である名古屋市立大学の小児科に入局した。当時は卒業後、すぐに医局に入局する時代だった。新生児、循環器、血液腫瘍などさまざまな専門グループで学び、その後、関連病院を回りながら小児科医としての研鑽を積んだ。その間に大学の同級生であり循環器内科医の夫と結婚した。

「ある日、夫が『大きな病院がたくさんある医療に恵まれた場所ではなく、医療資源の限

られた地域で経験を積みたい』と言ったんです。わたしも医師として賛成でした。夫は北海道で病院を探していたのですが、急な呼び出しがあった場合、雪のなかを運転するのが怖くて、そこには反対していたんです」

そんな話があった頃、夏休みに夫と沖縄に旅行に出かけ、竹富島を観光したときだった。パソコンを広げていた夫が「八重山病院が募集している！」と村井先生に言った。「夫が、『八重山だったら雪が降らないから安心だろう』って、嬉しそうに言ったんですよ」と村井先生は微笑む。こうして村井先生は夫と共に、2年間の任期で八重山病院に赴任した。

小児科医としてのやりがいと、
八重山での楽しい日々

村井先生は子どもたちのどんな病気でも診ている。八重山病院は八重山圏域の最後の砦。「専門外だから診れない」「初めての症例だからできない」は一切ない。ここでは他の医師やスタッフたちのもっている知識と技術を総動員して診療にあたる。治療ができない場合は本島の病院へ搬送し、離島の患者は、海上保安庁のヘリで迎えに行くことも重要な仕事となる。

「小児科は幅広く、まだまだわからない分野もあります。大事なことは風邪などの軽度な症状からでも重大な病気を見逃さないこと。丁寧に診て、少しでも不安に感じたことは決して見過ごさず、オーバーというくらい細心の注意を払うことが大切です。子どもは少しのことでも状態が急激に悪化することもあり得ますからね」

子どもは反応が迅速でありダイレクトだ。逆に元気のなかった子どもが点滴一本で見違えるように元気になることもある。「点滴を打ってしばらくすると、看護師さんから『先生、お腹が空

いたと言っています』と言われる、思わず『もう元気になったの!』と驚いたこともありました。子どもはどんな重い病気でも、一所懸命、治療に向き合います。そんな子どもたちが元気になるのは小児科医としてこの上ない大きなやりがいです。子どもたちを救うことは未来をつくること。八重山の素晴らしい未来をつくるために少しでも貢献したいですね」
八重山に来てからオフも充実していると言う村井先生。こちらに引越して直ぐの休日には、同僚の医師から誘われスキューバダイビングを楽しみ、その魅力にすっかりはまってしまった。村井先生は八重山での生活を、「毎週、夏休みがある感じなんですよ」と素敵な笑顔で表現する。



● 小児科

新生児から中学生までを対象に、風邪、喘息、皮膚症状、発育発達、その他子ども全般の幅広い診療を行い、必要に応じて入院治療もしている。新生児集中治療室（NICU）を備え、産婦人科や内科との緊密な連携のもと、早産、低出生体重など、新生児の診療にも対応する。



OKINAWA DOCTORS SCENE

#03 沖縄で働く医師の話
～ 新・県立八重山病院特集 ～

「八重山病院で働きたい」
その思いを実現し、産婦人科医として
幸せをつくり、幸せな日々を送る。

● 産婦人科

古賀 千悠

先生

出身地：東京都 出身大学：琉球大学医学部（2007年卒）
琉球大学医学部卒業後、東京の虎の門病院で初期臨床研修。
同病院で産婦人科の後期研修も行う。その後、千葉県の国保旭
中央病院にて周産期やがん医療など産婦人科領域の幅広い研鑽
を積み、2015年より沖縄県立八重山病院の産婦人科に赴任。



医学生時代から

将来は「八重山病院で働く」と決めていた

沖縄の地に縁があった訳ではない。産婦人科の医長である古賀千悠先生の出身地は東京都だ。琉球大学に進学した理由を聞くと、「とにかく実家を出たかったので、大学は東京から遠く離れた北海道か沖縄県に行こうと思ったんです。寒いのが苦手だったので琉球大学に進学したんです」

と大きく笑った。

産婦人科を専門に進んだのは、実習でお産を見て、命の誕生に大きな感銘を受けたことや、女性であることがアドバンテージとなる診療科であったことが大きな理由だ。さらに古賀先生は、医学生時代から、「将来は八重山病院で働きたい」と強く思っていたという。

方々と触れ合ったり、与那国島への健診に同行したり、生き生きと働いている先生方を間近でみて、『将来は八重山病院で働く』と決めたんです。ここで働くために産婦人科領域を幅広く診るための実力をつけようと思いました」

古賀先生は大学卒業後、自分が生まれた病院でもある東京の虎の門病院で初期研修を行った。後期研修も引き続き虎の門病院で行い、卒業後5年目に千葉県の国保旭中央病院に赴任し、周産期はもちろん、がん治療などの幅広い産婦人科分野の研鑽を積んだ。その間に産婦人科専門医も取得。産婦人科領域を幅広く診る実力を携え、2015年より念願の八重山病院に赴任した。

産婦人科は、幸せをつくり、
幸せになれる贅沢な診療科

常に魅力的なんです」

いま、全国的に産婦人科医が不足しているが、古賀先生に産婦人科の魅力を聞くとこんな答えが返ってきた。

「産婦人科は、不妊治療、妊娠中の検診、出産、がん、良性疾患、それに帝王切開や子宮筋腫などの手術も行います。内科的治療も外科的治療もあり、とにかく幅が広い。だからこそ、いろんな働き方をすることが可能ですし、いろんなことに興味のある方がそれぞれの興味を満たすことができ、しかも生命が誕生する尊さに触れることができる。そんな贅沢な診療科は他にありません」

古賀先生は休日にもスキューバダイビングを楽しむなど、充実した日々を送っている。「ダイビングも八重山病院に来たかった理由なんです。それに最近スタッフの友達に勧められて三線も始めたんですよ」と古賀先生は目を細める。

忙しくて厳しいイメージのある産婦人科だが、古賀先生の表情に厳しさや疲労の色は一切ない。目標だった、産婦人科医として八重山病院で働くことを実現した古賀先生。その表情は穏やかで、笑顔には幸せが満面となって現れていた。産婦人科医は幸せをつくり、幸せになれる仕事なのだ。

● 産婦人科

八重山圏域で年間約600件の出産数に対応している唯一の出産可能施設であり、入院施設を備える。「産科」領域では、「地域周産期母子医療センター」に指定されており、小児科や内科等他科との緊密な連携のもと、合併症妊娠やハイリスク出産などにも対応。また「婦人科」領域では、「地域がん診療病院」に指定されており、悪性疾患はもちろん良性疾患の診断・治療も行っている。



沖縄の地は
医療者としての“生まれ故郷”。
沖縄で医師になり、
医師として成長できることは
誇りです。

● 沖縄県立八重山病院附属 小浜診療所

山田 拓 先生

出身地：神奈川県 出身大学：琉球大学医学部（2014年卒）

琉球大学医学部卒業後、沖縄県立中部病院のプライマリ・ケア
コース（島医者養成プログラム）で島医者となるための研鑽を積む。
2017年4月より沖縄県立八重山病院附属小浜診療所に赴任。
島民や島に訪れる観光客の健康を支えている。





子どもの頃から憧れていた
「綺麗な島」での生活を実現

石垣港からフェリーで約30分。人口7000人弱の小浜島は、2001年に放送されたNHKドラマ「ちゅらさん」のロケ地として知名度が上がり、全国から多くの観光客が訪れている。

この島、唯一の医師である小浜診療所に勤務する山田拓先生の出身地は横浜市。小学校6年生のときに「ちゅらさん」を観て「こんな綺麗な島に住んでみたい」と強く思った。それ以来、沖縄での生活に憧れ続け、琉球大学に進学。離島実習で、島医者に大きな興味を抱いた。



大学卒業後は沖縄県立中部

病院の島医者養成プログラムを選択。島医者になるための研鑽を積み、2017年4月に小浜島に赴任。テレビで観て憧れた「綺麗な島」での生活が始まった。

島で医師は山田先生一人。医療資源も限られているため、問診や身体診察、エコーなどの基本手技を中心に診療を行う。山田先生は、こうした環境だからこそ得ることができる医師としての大切なスキルがあると言う。

「島の医療環境では、患者さんの重症度を判断し、緊急でヘリ搬送が必要かどうかのトリアージ能力や、総合病院へ搬送するまでの処置や治療（プレホスピタルケア）についてのスキルを得ることができません。また、医師一人という不安はありますが、イン



ターネットテレビによって専門の先生に意見を聞くことができ、すし、WEB勉強会なども開催して医学知識のアップデートもできます。離島でも最新の医療を学ぶことができるのです」

離島医療のレベルは、
そこにいる医者のレベルである

島民は飲酒や喫煙の割合が高く、生活習慣病が多い。さらに小浜島には歯医者がないため虫歯を放置しがちであることも問題だ。そのため島民への啓発活動も重要な仕事となる。山田先生は小学生に向けて「保健だより」を作成し歯磨きの重要性も教えている。普段の外来診療や在宅診療に加え、学校医や外国人を含む観光客を対象とした旅行医学、保健所との公衆衛生事業、中核病院との病診連携、地域包括ケア、そして自宅での看取り（終末期医療）など、実に幅広い

分野を山田先生は担う。

「離島医療のレベルは、そこにいる、島医者のレベルに相当するんです。自分の知識量や技量の限界、今の自分に何が必要なのか次のステップアップへの課題も見つかり、それを直ぐに診療に実践することもできる。やりがいはいっぱいですが、患者を診る、地域を診る、この両方を学ぶことができる最高の場所がここにあるのです」

山田先生は島の人々との交流や祭事などの地域行事にも積極的に参加している。夏にはSUP（スタンドアップパドルボード）を近くの海岸で楽しみ、官舎では島の人から譲ってもらったヤギを飼っている。「これが、本当にかわいくてね」と山田先生の顔がほころぶ。山田先生は医師としても、島民としても小浜島の日々を思いきり楽しんでいる。

「沖縄の地は医療者としての生まれ故郷。沖縄で医師になり、医師として働き、医師として成長できることをとても誇りに思います」と山田先生は力強く語る。

自信をもつて「誇りに思う」と言うことができる。そんな医師人生を歩む山田先生の表情は、島に降り注ぐ太陽の煌めきよりも明るく輝いていた。



Hospital Data

沖縄県立八重山病院附属

小浜診療所

〒907-1221

沖縄県八重山郡竹富町字小浜30

TEL: 0980-85-3247

<https://www.ritoushien.net/kohama.shtml>



OKINAWA Residents Story

沖縄の研修医の話

～ 新・県立八重山病院特集 ～



INTERVIEW

総合診療科 専攻医

#01

富名腰 朝史

先生

Tomofumi Funakoshi

出身地：沖縄県南城市(旧玉城村)

出身大学：琉球大学医学部(2015年卒)

琉球大学医学部(地域枠)を卒業後、沖縄県立中部病院のプライマリ・ケアコース(島医者養成プログラム)にて研修。2018年に研修プログラムの一環として沖縄県立八重山病院に赴任。



「島医者」を目指し、
「島医者」となるために

富名腰朝史先生は大学卒業後、沖縄県立中部病院のプライマリ・ケアコース(島医者養成プログラム)で初期研修を行った。このコースは、初期研修の2年間と後期(専攻医)研修の3年間で、島で唯一の医師として対応していくための幅広いスキルを習得する。離島での単独診療(専攻医3年目)がプログラムされており、富名腰先生は現在プログラムの一環として八重山病院に赴任し、2019年からは離島の「島医者」として働くことが決まっている。

富名腰先生は、島医者になるため、県立中部病院で内科や外科はもちろん、小児科、産婦人科と幅広く研鑽し、臨床研究分野では公衆衛生に必要な統計学なども学んだ。

「中部病院で経験したことを活かしながら八重山病院では主治医として患者さんを診ています。外来はもちろん、在宅医療や看取りも経験するなど、自分ができる役割が大きく広がったと感じています。ここに来てから離島医師の夏休みなどによる代診や、プライベートでも離島に行く機会が増え、「島医者」になる現実味も



“島医者”を経験した自分が、

どのように変わってゆくのか。

自分の成長した姿を見るのが楽しみです

増してきました」と富名腰先生は瞳を輝かせる。

八重山病院は八重山圏域で唯一の総合的な診療ができる中核病院であり、さまざまな症状の患者が数多く集まってくる。富名腰先生は内科の研修を積んでいるが、診療の合間に整形外科の外來で関節注射を打ったり、エコーガイド下神経ブロックをしたりと多くのスキルを吸収している。

「自ら手を上げて経験できることはもちろん、各科の先生たちから『これやってみたいか』という声掛けも多くあり、上の先生たちの距離の近さや各科の垣根の低さは驚くほど。日々、何かしら新しいことを吸収することができる環境です」

八重山病院では患者や住民との距離も近い。外ですれ違っても「富名腰先生」と気さくに声が掛かる。「ご飯を食べに行こうと病院を出たとき、患者さんのご家族から冗談で、『先生、いま帰るの？タクシー捕まらないから送ってよ』と声を掛けられたり。それくらい住民との距離が近いんですね」と富名腰先生の顔がほころぶ。

できないことの不安は、できる楽しさとなる

高校時代から、島医者になることを夢見ていた。2019年

には念願の、島医者となる富名腰先生。八重山病院に来てから小浜島や西表島の代診も経験した。代診とはいえ、島で医師一人になるのは大きな不安もあったらう。

「初めての代診を経験した小浜島の初日は一睡もできず、診療所のPHSをずっと見つめながら朝を迎えてしまいました。日中は頭が真っ白になりました。患者さんに対処し、一つの成功体験にはできたのかなと思います」

この不安は離島医師なら誰もが経験することだ。だが、離島診療所にはインターネットによるテレビ電話があり、中部病院や八重山病院の医師たちにいつでも相談ができるバックアップ体制が整っている。

「わからないことがあれば気軽に電話で聞くことができる先輩がいっぱいいる。それがすごく心強いですね。まだまだできないこともたくさんあり、落ち込むことが山ほどあるのですが、逆に言えば、それだけ次はこうしたいと思うことや、その成長できることがたくさんあるということ。島医者になるのは不安よりも楽しみのほうが多いです」

富名腰先生は、島医者になった

たあとの自分がどう変わるのか楽しみだと言う。医療資源の限られた離島で、子どもから老人まで地域をまわること、しかも卒業5年目の若い医師が一人で診る。それはとてもなく凄いいことであり、長い医師人生のなかで間違いなく大きな糧となるはずだ。

「島医者になってから見えてくるのがたくさんあると思っています。それを自分がどのように感じ、どのように自分が変わってゆくのか、それが見たいんですよ」。その言葉には医師としての自信も垣間見えた。数年後、島医者を経験した富名腰先生がとても楽しみだ。



座右の銘

曲なれば則ち全し



初めての代診を経験した小浜島のシュガーロード



OKINAWA Residents Story

沖縄の研修医の話

～ 新・県立八重山病院特集 ～



オバアから学んだ、
医師の重責と社会的役割

大学時代にテレビのクイズ番組に出場し、2度の優勝を経験。その博学ぶりと端正な容姿で人気を博したのは記憶に新しい。沖縄県立中部病院の内科コースで研鑽を積む亀谷航平先生だ。現在（2018年12月まで）、内科専攻医研修の一環として八重山病院に勤務している。

愛知県出身、中学高校は鹿児島、大学は東京。そんな亀谷先生が、医師としての研鑽の場に自身にゆかりのない沖縄の地を選んだのは何故だろう。

大学時代のほとんどを、バイトやクイズ番組で稼いだお金で世界中を旅して過ごした亀谷先生。中部病院との出会いは、そんな学生生活のなかで、友達3人とスキューバダイビングをするために沖縄に遊びに来たときのことだった。

「友達が、軽い気持ちで『県立中部病院を見学したい』と言ったのがきっかけでした。最初はただ忙しくて辛い研修病院という印象しかなく、正直全く乗り気ではありませんでした。ところが実際に見学してみると、研修医の先生たちが多忙の中でも活き活きと働く姿に衝撃を受け、ぼくの中で大きな化学反応が起こったんです。他に

もいくつか病院を見学しましたが、『自分にはここしかない』と感じた唯一の病院でした」

こうして亀谷先生は大学卒業後、県立中部病院の内科コースに進んだ。県立中部病院は沖縄県の救急医療を担う最後の砦。医師たちに求められるのは、『ここで駄目ならば患者は助からない』という覚悟だ。こうした環境で、指導医や先輩研修医の厚いフォローがあるとは言え、ほとんど研修医が主体となつてあらゆる患者を診る。

「1年目の早くから手技はもちろん、病状説明も行います。患者さんとの関わりは非常に濃密であり、技術だけではなく、医師としての重責や社会的役割など、人としても大きな学びを得ることができます」

ある日の八重山病院での外来で、たった1回顔を合わせただけの患者が、「先生のお陰で命拾いをし

「いずれは海外に出て、
公衆衛生や国際保健の分野で活躍したい」
沖縄から、世界という大きな舞台を目指す

INTERVIEW

内科 専攻医

#02

亀谷 航平

先生

Kohei Kamegai

出身地：愛知県

出身大学：東京大学医学部（2016年卒）
東京大学医学部を卒業後、沖縄県立中部病院の内科コースで初期臨床研修。内科専攻医研修の一環として、島の医療を学ぶために沖縄県立八重山病院へ短期赴任した。



Internal Medicine
Kohei Kamegai



ました」と言っ、沖縄の高級魚であるアカマチの刺身を持ってきたことがあるという。以前頭痛を主訴に救急センターを受診し、外来でフォローすることになった心配性のオバアであった。

「ばくが、そのオバアにしたことといえば、頭部のCTで異常のないことを確認し、『大丈夫ですよ』と声をかけたただけなんです。それでも、白衣を着た一人の医師として『大丈夫』と言ったばくの言葉が、そのオバアにとっては大きな安心となったようでした。医師は言葉一つで良いようにも悪いようにも患者さんの人生に大きな影響を与えてしまいます。医師は患者さんの人生に対して大きな重責を担っているんです」と先生はそのオバアを思い出しながら、嬉しそうに語った。

沖縄の医療を経験したことで得た、将来の大きな目標

亀谷先生は初期研修のローテーションで特に感染症内科に興味を持ったという。県立中部病院の感染症内科では、患者から社会歴を事細かに聞く。出生、生い立ち、お酒やタバコの量などの生活習慣はもちろん、その銘柄やペットの名前までも確認し、患者背景をとことん掘り下げていく。それが診断に繋がることも多いが、それ以上に、尊厳をもった一人の人間として患者を大切に扱う同科の姿勢に深い感銘を受けた。

また感染症医療は、沖縄にくてはならない分野でもある。「日本はグローバル化が進んでおり、2020年は東京オリンピックが控えています。特に沖縄は海外から病原体が入って来やすい環境にあり、感染症医療は今後ますます重要な分野になると思っています」

沖縄県を訪れる外国人観光客は年々増加の一途をたどっている。2018年3月から6月にかけての麻疹の流行は記憶に新しいが、沖縄県は新興感染症流行のリスクを常にはらんでいる。こうした環境では、感染症を専門とする医師は島の医療に不可欠な存在となる。特に八重山

地域ではそうした医師も少なく、その需要は増すばかりだ。こうした環境で研修を行っている彼にとって、感染症を専門にしようと考えるのは自然なことであった。

また先生が沖縄に来て感じたのは、多くの病気が「貧困であること」で説明できることだった。残念ながら、沖縄は日本で最も貧困問題が根深い地域の一つである。家庭内の問題、経済的な問題などで病気を放置して悪化させてしまい、病院にかかったときには手遅れとなった例を数多く目の当たりにしてきた。この土地で研修を積むことで、本当の意味で人を救うには、社会システムそのものを変える必要があると気づくのにそう時間はかからなかった。

感染症を専門とする医師として研鑽を積みつつ、将来は日本を飛び出し、貧困などの健康に関わる社会システムの提案、構築に携わっていききたいという野望があるという。

「いずれは世界に出て、公衆衛生や国際保健の分野で活躍したいです。沖縄のかたがたに支えられながら、一生懸命勉強させていただけだと思います」

沖縄の地から、先生は世界という大きな舞台を見据えている。

座右の銘

Think globally,
act locally.

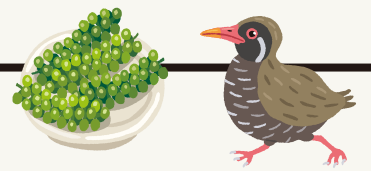


世界中を旅していたころの写真。壁に描かれた絵はバンクシーの『The Armed Dove』。(パレスチナ)



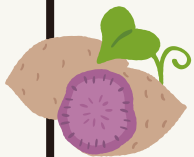
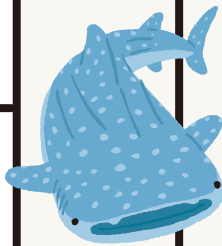
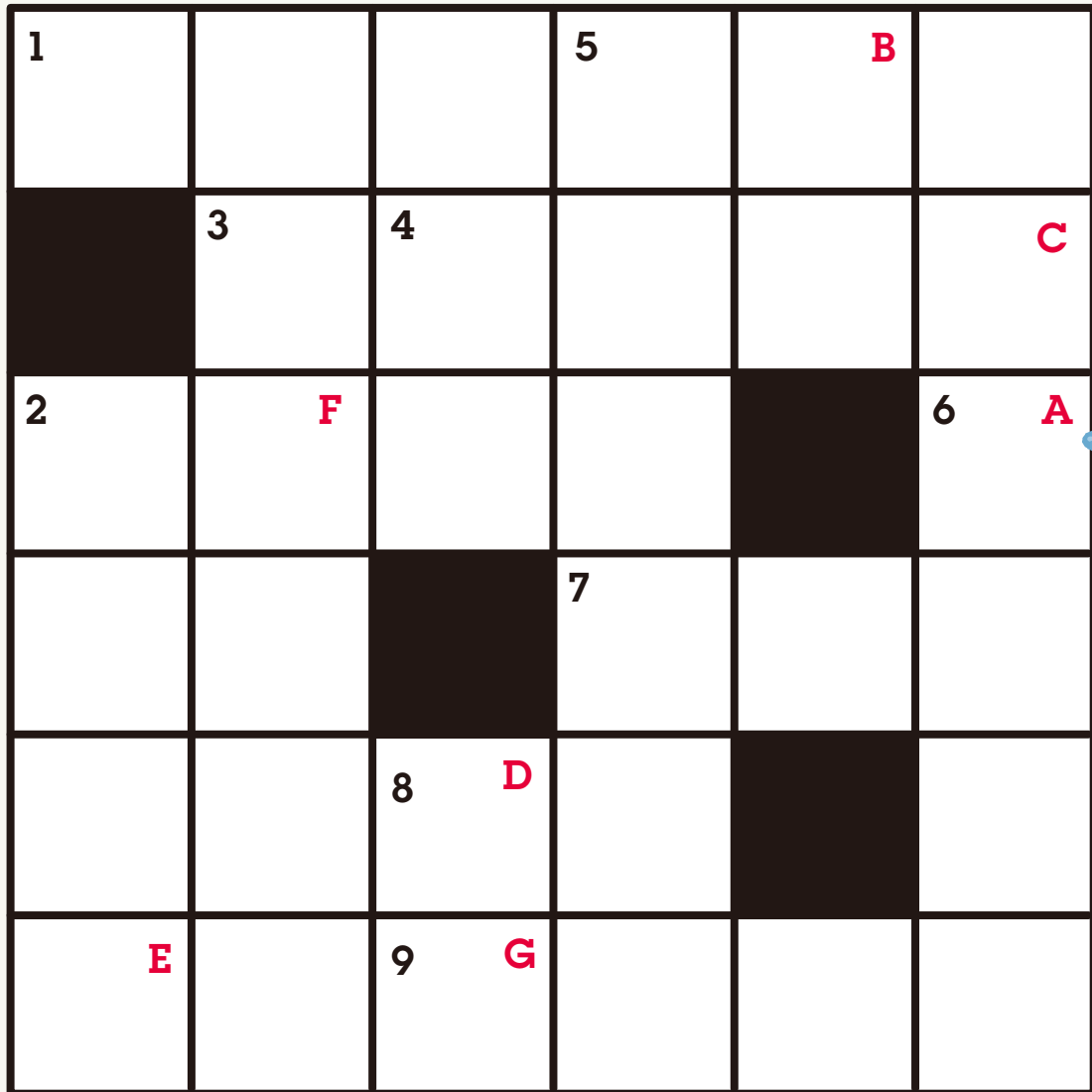
尊敬する砂川淳司先生が駐在する西表大原診療所を訪問したときの写真。





Okinawa Crossword Puzzle

沖縄クロスワードパズル



ヨコのカギ

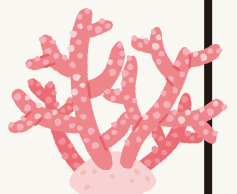
- この冊子のタイトルは？
- 石垣島出身の世界チャンピオン
元プロボクサーの『○○○○用高』
- 北谷町の「北谷」の読み方は？
- お土産の新定番「マンゴー○○○」
- 沖縄の方言で「美味しい」は？

タテのカギ

- 沖縄家庭料理に欠かせない、沖縄県魚は？
- 蛇革を張るのが伝統的な三線。蛇の種類は？
- 沖縄の方言で「ごちゃまぜ」という意味で使われる
野菜や豆腐などを炒めた沖縄料理は？
- 沖縄独特弦楽器といえば？
- 沖縄のお土産として定番のガラスの『ちゅら○○』

答え

A	イ	B	C	D	E	ノ	F	G
---	---	---	---	---	---	---	---	---





オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン



「Muru Uchina(ムルウチナー)」第7号をお届けしましたが、いかがでしたでしょうか。

沖縄県地域医療支援センターは医師の地域偏在解消を目的とする組織です。

この冊子で少しでも私たちの想いをお伝えすることができれば幸いです。

ご意見・ご感想などお待ちしております。

発行



沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215

沖縄県中頭郡西原町字上原207番地

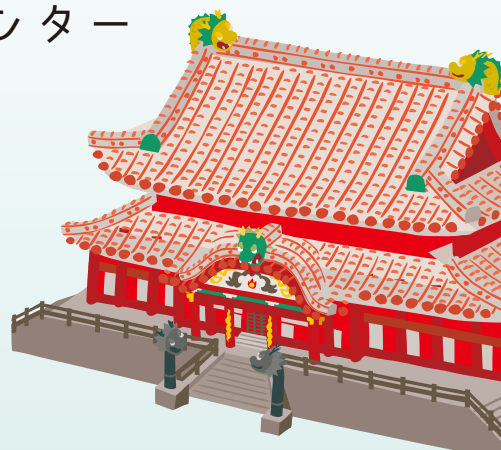
琉球大学医学部附属病院

おきなわクリニカルシミュレーションセンター内101

TEL : 098-895-1225

E-Mail : chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp>



ムルウチナー バックナンバー



vol.06



vol.05



vol.04



vol.03



vol.02



vol.01

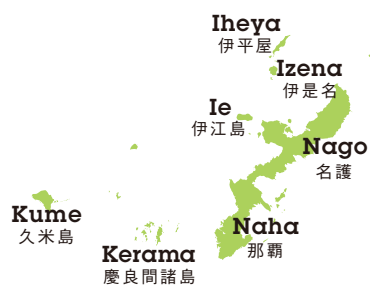
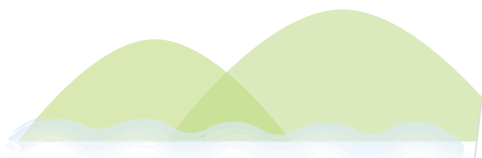


編集制作

【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社

ディレクター・デザイン：勝又シゲカズ 文：田口素行 撮影：小山英樹





北大東島
Daito
南大東島

Yonaguni
与那国島

Ishigaki
石垣島

Miyako
宮古島

Iriomote
西表島

Hateruma
波照間島



沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
琉球大学医学部附属病院 おきなわクリニカルシミュレーションセンター内101
TEL : 098-895-1225
E-Mail : chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp>

